

ある。生と死の相對器から脱けて今一段大きい安息の世界、それは死の浄土である。岩に激し岸を齒み淵となり瀬となり転々流動して止まぬ生の河流は遂に大海の平安を求めてそこに眠る。何と言ふ泰けき死の相たゞ。私はほれぐとその美貌に見とれる事さへあるのだ。

君よ、安らかに、如来の座に眠つてゐておくれ。

地上の命数を果した諸友の誰彼はまた曇如として君の後を訪ねるであらう。私もその一人である。

仏飯に鼠出て来よ梅雨寒き

(曲水10—9)

## 長頸子君と私

川越 苔雨

行人坂の下に古い川が流れてゐる。椎の落葉に埋れた川の底には、空も樹影を映さず、只坂の途中のお寺の鉦が響く位ひなもので、至つて暗い川だ。その川のほとりを背戸に、さ、やかな平家作りの、門の真近に細長い松の木が一本樹つてゐる。

建仁寺垣の内の庭木から見透される縁の障子は白々といつも閉つてゐた。

そこに長頸子君は、令弟鳥喙子君と田舎出の質樸な婆やとの三人で静かな暮しをして居たのだ。四年越しのかうした寂しい生活に何の不平もなく住んではゐるもの、どつか知ら物足らぬもの、潜んでゐる事は争はれなかつた。時折郷里の静岡から上京される両親や妹さん達の足留り場所にもなつて居た。玄関の沓脱に思ひ掛けぬ赤い

緒の履物を見たり隣座敷から父君の咳など聞える事もあつた。そんな時ふつと温かい家庭の空氣が漂つて明るい感じがする。然しそれが又すぐに二人の静かな家になつてしまふ時の事を考へると、却つてその温かな明るさが一層淋しい感じに引入れて行く。

去年の秋だつた。樹人君から長頸子君のお父さんが亡られたと云ふ意外な電話がか、つて来た。その時私は長頸子君が……と自分の聞き違へではないかとさへ思つた程、その頃からの長頸子君は散歩さへ疎まれる程の病床の人となつてゐたのだつた。

父君と云ふのは人品の良い謹嚴な態度のどこか親し味のある人だつた。それで我が子達のかうした生活や芸術に対しても十分理解を持たれて、上京の都度安々とこの子供達の家を休息して居られたのだつた。が病弱の父君はとう／＼在京中兄弟の家で亡なられて了つた。此の傷ましい不時の出来事に父の死を悲しみ、病兄の身を案ずる鳥喙子君の心情は更に推して知るべしである。

床の間に白布を敷いた仮の仏壇には、亡父君の活動盛り時代であつたらしい洋服姿の寫真が飾られて白い菊が挿されてあつた。私達が交る／＼線香を上げる内、襖を一枚明けた次の間で長頸子君は、ぢつと枕につつ伏したま、でゐた。やがて元の座へ戻つた私達に、かすかに頭を動かして、どうも有り難う、と低い声で云つた。

それからは殆ど寝たぎりで、人に手紙さへ余り書かなくなつた、それでも私達が行くと、原稿紙や新聞で埋まつた床に起き直つて喜んで迎へて呉れた。そしていつもの通り何かしら面白い話題を次から次と持出しては話された。然しもう余程病状は進んでゐるらしかつた。で万事を捨て、此の際入院か転地するかかの二ツである事を切に勧めた。処が長頸子君は未だそれ程の事でも無いと云つて頑にも落付いて此の病床に甘んじてゐたのだつた。